

んできた。朝昼晩、深夜早朝、休日でもお構
いなしに電話がかかってきた。携帯電話が鳴
るたびに、めまいがするほどのストレスに襲
われ、大町さんは携帯電話の着信音を何度と
なく変えたという。

——逃げようとすればするほど追いかけれ
る。

老夫婦中心の毎日が3年間続いた。どこま
で利用者の生活にかかわらなくてはならない
のか、これだけ尽くしているに「ありがと
う」の一言もない、ケアマネジャーの仕事っ
ていったい何なのか…。悶々とした日々のな
か、ふと「逃げるのはやめよう」と思いを切
り替えてみた。

「人の考え方や生活のあり方は一人ひとり違
う。その人のすべてを認めて、正面から向か
い合っていこう」

そんな思いでかかわり始めたとたん「妻
を思う夫の気持ちが見えてきた」という。夫
からの電話も、うそのように減っていった。
それから2年後に妻は亡くなり、その半年後
に夫は後を追うように旅立った。

「あのご夫婦が私を育ててくれました」

その後大町さんは、いわゆる困難ケースや
ターミナルを積極的に担当するようになる。
数多くの「別れ」も経験した。そんななかで
言われたのが「あなたに会えてよかった」と
いう言葉だ。その言葉をありがたく受け止め
ながら、「私個人にではなく、『ケアマネ
ジャーに会えてよかった』と言われるように
仕事を深めたい」と大町さんは考えている。



大町さんが管理者を務めるさんわケアプランセンターは、老人保健施設みどりの里の中にあり、三和中央病院(精神科・心療内科・内科・歯科)に隣接する。ケアマネジャーは6名。特定事業所加算(Ⅱ)の居宅介護支援事業所だ。「看護師には、ナイチンゲールという目標があります。ケアマネジャーにも目標とする人があっていいですよ」と大町さんは言う。



ストレスの解消も兼ねて、大町さんは6年前に剣道を始めた。現在は3段の腕前。大声を出し、竹刀を振り、明日への活力を養っている。